

Clinicopathological and histopathological review of dedifferentiated liposarcoma: a comprehensive study of 123 primary tumours

毛利, 太郎

<https://hdl.handle.net/2324/6787449>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名： 毛利 太郎

論文名： Clinicopathological and histopathological review of dedifferentiated liposarcoma: a comprehensive study of 123 primary tumours

(脱分化型脂肪肉腫の臨床病理学および組織病理学的検討：原発症例123例の包括的研究)

区分： 甲

論文内容の要旨

目的：脱分化型脂肪肉腫は、後腹膜や四肢に好発する悪性軟部腫瘍であり、多様な組織形態を呈するものの、個々の組織形態と予後との相関は十分に解明されていない。本研究では、当教室で診断された原発性の脱分化型脂肪肉腫123例（体腔内発生81例、末梢発生42例）の臨床情報収集および組織学的レビューを行い、多数の臨床病理学的因子と予後との関係を調査した。

方法と結果：臨床的には、全体、体腔内発生、末梢発生のいずれの群においても、遠隔転移症例で全生存期間の有意な短縮を認めた（単変量解析にてそれぞれ、 $P < 0.0001$, $P = 0.0011$, $P = 0.0101$ ）ものの、再発症例では全生存期間の有意な短縮を認めなかった。組織学的には、体腔内発生群で高有糸分裂数群および円形腫瘍細胞を有する群で有意に全生存期間が短縮していた（多変量解析にてそれぞれ、 $P = 0.0022$, HR 4.39, 95% CI 1.71-11.28; $P = 0.0014$, HR 7.19, 95% CI 2.14-24.16）。また、末梢発生群では、壊死および高異型度成分を有する群で有意に全生存期間の短縮を認めた（単変量解析にてそれぞれ、 $P = 0.0068$, $P = 0.0174$ ）。

結論：既報で示されたように、体腔内発生の脱分化型脂肪肉腫では、円形腫瘍細胞の有無が重要な予後因子となり得る。また、本研究において、遠隔転移は予後に悪影響を与えるものの、再発は予後との相関が明らかでないことを明らかにした。